

7. コロンビアの非日常1：お祭りの話 その1

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

今から約30年前、天理教コロンビア出張所の門前には2軒の「ディスコ」があった。週末（金曜日・土曜日）は繁盛していて、たくさんの人で賑わっていた。出張所の神殿での「おつとめ」（天理教のお祈り）の音を超えるほどの大音量だったのを覚えている。現在ではコロンビアの「非日常」は金曜・土曜からではなく、木曜日あたりから始まり、バーやディスコのみならず、自宅でもアパートの公共広場でも展開される。とにかくボリュームが大きいのである。しかし、このほかでかい音量に関しては近所迷惑にならないという。それが習慣だからである。

さて、前回までは通常の生活に即した「日常」話を書いてきたが、今回より「コロンビアの非日常」をシリーズとして、いつもと違うこと、つまり日常でない、当たり前ではないことを紹介したい。それは、「非日常」的な事柄もまた彼らの現実社会だと考えるからである。

冒頭のように、お祭り、パーティー、フィエスタという「非日常」から入ろうと思う。以前（2019年8月号）にもこのフィエスタを取り上げたが、今回は順序立てて描写したい。

お祭りというスペイン語の翻訳は「フェスティバル」もしくは「フィエスタ」である。このフィエスタにもいくつかタイプがあり、宗教的祭典、家族・個人的祭典などと分けることができる。コロンビアにおいては、「フェスティバル」は大規模な行事を表す。今回は、ラテンアメリカ社会の「フィエスタ」という「日常の中の非日常」の意義やそのあり方を探って行きたい。

なお、ラテン語・イタリア語・ポルトガル語から由来した「フィエスタ」という言葉のほうが日本では使用されることが多い。

7・1 フィエスタ（お祭り）

「郷に入れば郷に従え。」この言葉は、私の海外生活の座右の銘にしている諺である。「郷に従え」とはぶっきらぼうに聞こえるが、その習慣や社会規範を尊重し感謝することにつながる言葉だと理解している。それぞれの土地、故郷にはそれぞれのお祭りがあふ。そのお祭りに通じることは海外生活者にとっては必要だ。

さて、筆者の勝手な見解だが、フィエスタには大きく分けて二つあると思う。それは、1) 大衆フィエスタ（ファミリーフィエスタ）と2) 伝統的フィエスタである。

7・1・1 大衆フィエスタ

いわゆる「ホームパーティー」である。アメリカ映画（北米作製）では、必ずと言って出てくるホームパーティーのシーンがある。それをイメージしていただきたい。この大衆フィエスタでの必須アイテムは、音楽、料理・飲料、ダンス、若干の装飾である。

コンプルテンセ（マドリード）大学の社会学者アンパロ・ラセン教授は、大衆フィエスタについて次のように分析している。

（フィエスタは）社会学的・人類学的に研究されています。フィエスタは私たちが日常と日常の秩序から分離させ、安らぎを与えます。また人々は強い感情を抱いて、音楽を通して楽しい時間を友人と共有します。また人々と知り合い、ダンスをしたり、食事をしたり、音楽を聞いたりしながら、日々の人間関係や身体的行動を忘れさせます。そういう可能性を持つのがフィエスタなのです。⁽¹⁾

少し難しい表現だが、要するに日常と決別というか分離をして、フィエスタは楽しませるその場・空間であろう。コロンビアはもとより、フィエスタはメキシコからブラジルまで盛んで

ある。この「集まり」を禁止し、また危険行為として扱ったのがコロナ禍、パンデミックであった。以前にもこの連載の中で書かせてもらった（2021年7月号）。そこでは

こう述べた。「この5カ月にも満たない時期（2020年3月～9月）にカリ、メデジン、バランキージャ、カルタヘナの4都市において7,701件の違法であるフィエスタ（パーティー）が摘発された。これは行政と警察がコロナウィルスまん延防止に対する挑発現象とも捉えられている。⁽²⁾

*フィエスタは止まらない

法律でいくら取り締まろうが、衛生的観念から禁止されようが、フィエスタは止まらない。前述のアンパロ・ラセン教授は次のように説明する。

パーティーの雰囲気というのは多くの人が集まり、知人や友人だけでなく、初見の人も混ざります。しかし、ダンスでの身体的接触が禁じられ、（コロナ禍では）危険とされました。しかし人々はフィエスタを実行しようとしていました。ネットを通じてバーチャルでお祭りを再現しようとしていました。けれども行えば行うほど、本物のフィエスタの価値とかけ離れていく感じでした。オンラインで集まることはフィエスタにおいては同じではありません。⁽³⁾

*フィエスタ・ディスコ

再び、およそ30年前の話である。天理大学と提携校であるバージェ大学では現在でもそうだが、毎週金曜日に中央学生食堂が「ディスコ（今はクラブというのだろうか）」に早変わりし、低料金でダンスが楽しめるフィエスタが行われていた。そこでは、学部や学年、また学生や教授、助手など、普段の「垣根」を超えて、ダンスを楽しみ、お酒を楽しみ、ボックスでは会話を楽しんだ。まさに日常から離脱した心と体の「栄養ドリンク」が五臓六腑に広がった感じがしたようだった。

現在、コロンビアではパンデミックが落ち着いて、ホームパーティーや繁華街でのフィエスタが繰り広げられている。仕事や規範、合理性などの日常と共に、このフィエスタという非日常的活動が人生には必要ではないか、とラテンアメリカ世界で暮らしてみて実感している。

【註】

- (1) Carlos Benito "Por qué necesitamos la fiesta" (なぜお祭りは必要か) <https://www.elcorreo.com/vivir/relaciones-humanas/por-que-necesitamos-fiesta-20211008101424-ntrc.html>.
- (2) 清水直太郎「コロンビアへの扉16」『グローカル天理』Vol. 22. No.6 June 2021.
- (3) Carlos Benito "Por qué necesitamos la fiesta" (なぜお祭りは必要か) .



コロンビア出張所のフィエスタの様子(2019年9月)